

---

# 『完全犯罪』の定義 - 月下草シリーズ04 -

秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『完全犯罪』の定義 - 月下草シリーズ04 -

### 【Nコード】

N6360C

### 【作者名】

秀

### 【あらすじ】

「Mooners」の四方山話です。物騒なタイトルですが、物騒なことは起こりません。月の下で酒に寄う人たちのことから。

「本当に完全犯罪ってあると思う？」

丑三つ時を三時間ほど後に控えたある日の『Mooner's Bar』。半地下構造の店内スペースには十三夜の月光が柔らかに射し込んでいた。客は常連ばかり7人ほどがいた。

どういった会話の流れからであつたか、一人のふとした疑問から、何だか会話の内容が殺伐としたものになっていた。

「基本的にはありえないと思う。

今の時代、現実にはどんな細かい証拠からでも人物を割り出すことができるというし。人間一人が存在したという証拠を全く消すというのは、とても難しいことだろう？」

「ありえないことはないと思う。

現に、年に何百、何千と行方不明者がいて、その全員が見つかるわけじゃないだろう？死体が見つかったも、犯人どころか犯罪の可能性すら気付かれない場合だってある。その中には、本当に完全犯罪を成し遂げたものもあるんじゃない？」

「そもそも完全犯罪ってなんだよ？」

「犯罪をしても絶対捕まらないこと」

「完全犯罪【かんぜんはんざい】犯罪によるものであるという証拠を全く残さない犯罪。」

「出た！歩く辞書！」

「証拠を残しちゃだめだよな」

「逃げおおせれば、それも成立？」

「何か違う気がする」

「逃げるってことは追われてて、追われてるからには犯罪が立証されてる、ということでしょう？」

「立証できないから犯人を捕まえたいんじゃないの？ほら、被疑者不在でも立件できるって言っし」

「私はね、疑われちゃだめだと思う。誰にも気付かれないうちに遂行されたものが“パーフェクト”なんじゃないの？」

「うわ、厳しい」

「それじゃ犯罪があつたかどうかすらわかんないじゃん」

「だから“パーフェクト”」

「……ところでさ、『完全犯罪』殺人』って限定されてない？」

「……いや、そうは言ってないと思うが。誰も」

「あれ？」

「ま、『犯罪』殺人』が一番分かりやすい構図だしな」

「あつはつはー、そしたら何でもありね」

お母さんのサイフからお金を抜いたとか、へそくりを見つけてネコババするとか」

「どちらも窃盗罪です！」

「カレシの目を盗んで他の人とデートするとか」

「浮気でしょ？姦通罪？」

「そこまで言ってない！」

酔いのせいかメンバーのせいか、単なる与太話に陥りかけていたそんな時、それまでただにこやかに彼らの会話を聞いているだけであつたマスターは、ふと以前の会話を思い出していた。

「そういえば、以前面白いことを言っていた人がいましたよ」

マスターの呟きに、全員が一齐に視線を集中させる。

カウンター越しの全員、音がしそうな勢いで向き直ってきたのに、マスターは知らずあとずさる。

「何、何々？聞きたい聞きたい！」

「いえ、そんな、皆さんが喰いつくような話でも……」

今更のように尻込みするマスターであつたが、それを許してくれそうな状況ではなかった。興味津々のきらきらした瞳に囲まれて、彼は観念した。

「……そうですね、その人も何度かこの店に通つてくれている方なんですが……」

\*\*\*

「ねえ、マスター？」

「私ね、人を、一人、殺したことがあるの」

彼女は常連さんというほどではありませんが、よく来られる方で、私とも親しくお話をするようになっていた方でした。

基本的に明るくてよくおしゃべりされる方でしたが、時々ふつと沈み込むように黙り込むことのある方でした。そしてそうになると、元々の端正な美しい顔に、憂いと呼ぶべきであろうかげりが下りて非常に美しい表情をされるのです。

その日はお店に来られたときから少しかげりがありました。珍しいな、と思つたのを覚えています。

「　　穏やかな話ではありませんね」

「でしょう？私もそう思う」

奇妙なことに、彼女はしゃべりながら、少しずつかげりを濃くして、反対に機嫌はどんどん良くなっていくようでした。

彼女の話すことによると、大体こういうことのようにでした。

気が付いたときには、そこだけすっぱりと記憶が抜け落ちていた。唯一つ、その人物に関しての記憶と思い出のこと。

思い出せない顔。

思い出せない出来事。

どうやってその人と出会い、どんな話をして、そしてどんなことで傷付けたのか。

記憶の空白は都合よく捏造された記憶で何となく埋められていて、気が付かなければきつとそのまま跡も残さずに均されていたのだらう。

「名前すら、忘れかけてた。今も彼の顔は思い出せないわ。おかしいでしょう？つい数年前のことなのよ。何十年も昔のことじゃないわ」

そう、苦笑をもらす表情はぞつとするほど空虚で凄みがありました。

「それは、お付き合いしていた男性だったのですか？」

「そうね、お付き合いしてた。でもほんの短い期間だった」

「殺した、とは、どういうことなのですか？」

一番訊きたくて、しかし訊きにくい事を訊いてみました。

「その人の存在をね、消しちゃったの。すっぱりとね。完全に」

帰ってきた答えは、しかし、少し予想とは違うものでした。ややぼかんとしていたのでしょうか、私は。すると彼女は言いました。

「ねえ、マスター。人っていうのはどういう状態を生きているって言うと思う？」

「人はね、誰かの記憶の中に存在していてこそ、本当にその時、その空間に生きていたということが証明できるの。誰の記憶にも残らない人などいないでしょう？そういうこと。」

例えば極端な話、この世にたった二人しかいないとするでしょう

？二人はいつも一緒にいたとする。そうしたら互いが互いの存在を証明し合ってるわけよ。

でももしも二人が離れていて、互いに見ることも聞くこともできないとしたら？そうしたら生きてるやら死んでるやら、そもそも存在すら分からなければ、もし自分一人で日々生きていたとして、でも本当に自分は生きているということをどうして証明する？

人は、他人に自分の存在を認めてもらってこそ、本当に生きていると言えるし、記憶してもらっていることで、過去、その場所ですべて生きていたことが証明できるのよ」

「私はね、その人と過ごしていたその時間と空間の記憶を全てすっぽりとなくしちゃったの。いいえ、なくしたんじゃないわね。消したのよ、自分の意思で」

「その人のこと、確かに好きではあった。でも、もつと好きな人が、本当は別にいたの。自分自身も他人も、ごまかせないということに気付いたのは、その人と付き合うようになってからだった。

申し訳なかった。自分自身が恐ろしかった。

そして勘付かれた時、私は、その人の存在を私の心の中から消すことで自分の罪悪感から逃れようとしたのよ」

「…その、忘れようとしたというのは、お付き合いしていた男性の方、ですか？」

「ええそう」

「最初はただ日々の生活の中でその人の存在を心に留めないようにするだけだった。つまり徹底的に無視したということなのだけど。そうして、相手からも見放してもらえればいいとも思った。

そうしていたら、ある日気が付いたの。私の心の中にはその人がいない、その人と過ごした日々がない。それどころか名前も、顔も、曖昧になっているということに。

つまり本当に私の心はその人の存在を消去したの。そんな私の心の働きにも、私は恐怖したわ。そしてそれを忘れるために、更に記憶を消去したの。

気が付いたら、本当にその人の存在は、私の中で消えていた。

そんな自分の浅ましさに対する罪悪感のかけらは確かに今でも少しあるけれど、でも罪悪感の因る根拠が私の中にはないわけだから、もう私には何もない。その人に関することについてはね。

そうして、私は私の心の安寧を図ることに成功したの」

「それがあなたの『人殺し』ですか？」

「そうよ、だって私とその人が二人だけで共有すべきであった記憶があつたはずで、それをそのままなくしてしまったんだもの。確実にその時その場所にいたその人を、私は殺してしまっているのよ」

「その人がその時どこにいて、何を話し、何をしたのか、もう誰にも分からず、誰にも証明してあげることができないのよ」

「…その方は、今どこに？」

「知らないわ。探しようもないもの。そうでしょう？」

くすりと笑いながらおどけたように肩を竦めてみせる、そのいささか芝居がかつた仕草は、どこまでが本気で、どこからがわざとなのか、私には分かりませんでした。

まるで罪悪感など感じていなさそうな彼女の童女のような笑顔は、確かに美しいと思いました。

そして同時に、先ほどはよく分からなかったけれども、話を聞いてしまった今でははつきりと透けて見える彼女の”うつろ”に、私は何か寒いものを感じたのです。

\*\*\*



「と、こういう話なんですよ」

座の反応をうかがうようにマスターは視線をたゆたわせた。そこにはひとことでは形状し難い表情をした面々が、思い思いに思考を巡らせている姿があつた。

「なんだ、人殺しじゃないじゃん、結局、その人」

「それどころか『完全犯罪』ですら いや、それ以前にどこに『犯罪』があつたの？その人の話に」

「心変わりは一種の犯罪かもよ？」

「それだつて別に不倫したわけじゃなし」

「そうじゃないよ」

わいわいしだした場に、冷静な声が投げ込まれる。

「やっぱさ、それは一種の『完全犯罪』だよ」

「人一人の存在をこの世から消滅させてしまう 例えそれが自分一人の中からだけであつたとしても」

例えば最初から心がその人になつたのだとしても、一旦近しい関係となつたほどの相手なのに、その人の存在を全く忘れてしまふつていうのは、やっぱりその相手にとっては許し難い裏切りじゃないかな？」

「例え恋とか愛とか、そういう善い感情ではなくつても つまり、憎しみとか恨みとか、そういう感情でもいい。自分と少しの間でも、深く関わった相手には覚えていてほしいものじゃない？人間つていうのは」

「その人は、ある意味『人間』でいることを放棄したのかもしれないね」

再び活発な討論の場となった一団に、ややほっとしながら、マスターは片付け作業をしていた。

その時マスターは、彼らには話していなかった彼女の言葉をふと思いついて出した。

何故彼女はその日その時、憂いを纏っていたのか。

どうやら恋をしたようなのだ、と彼女は言った。そしてそんな自分に対する自分自身の感情に苛まれているのだと。

おそろしいのだ、と。

また同じことを繰り返すような自分が。

また同じ過ちを犯して、誰かを、自分自身を、傷付けてしまいうな予感に。

彼女は怯えていたのである。

「もしかしたら、彼女はあの時、初めて『後悔』していたのかもしれないですね」

そしてもう一度、「人間」として生き直す、チャンスの時だったのかもしれない、マスターはそう思った。

その日から再び姿を見せない彼女が、どうか「人間らしく」いてくれていることを、彼は願った。

F i n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、<sup>たんのう</sup>堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6360c/>

---

『完全犯罪』の定義      - 月下草シリーズ04 -

2010年10月8日15時36分発行